

# 国民 (nation) と人種・民族 (race or tribe) の問題

～ 解説 『ヴェニスの商人』、『オセロー』、『ユリシーズ』～

— 講義の流れ (要点) —

梅光学院大学名誉教授 吉津成久

## 1. 『ユリシーズ』～ 名前=実体か? (“Nameless” 対 “Noman”)

(1) 時は1904年6月16日木曜日。場所は極西の島国アイルランドの首都ダブリン。精神的な父を求める大学生スティーヴン・ディーダラスと精神的な息子を求める新聞広告業で38歳のレオポルド・ブルームは、市内を一日中流離って深夜近くやっと出会う。ホームがあってもホームレスの二人はアイルランド人とユダヤ人であり、いずれも他国人に領有権を篡奪され、諸国を漂泊してきた民の子孫である。

(2) ブルームはユダヤ人嫌いの「市民」(The Citizen) という綽名の男と「名前のない男」(Nameless One) によって、名前を通して実体を暴かれようとするが、「誰でもいい人間にして誰でもない人間」(Everyman or Noman) の資質をさずかるブルームは、彼らに自分の正体をつかませない。

(3) 「市民」は、ブルームの実体を二つの社会的秩序の観点から定義しようとする。すなわち、アイルランド国民 (nation) であるがユダヤ民族 (race) であるという国家秩序の観点とユダヤ人として「神に呪われた男」というキリスト教秩序の観点である。ブルームもスティーヴンもこの二つの秩序の観点に対し異を唱える。

## 2. 『ヴェニスの商人』～ 二つの社会的秩序 (キリスト教とユダヤ教) の対立

(1) この劇のタイトルは最初 “a book of the Merchant of Venyce or otherwise called the Jewe of Venyce” と登録された。このタイトルには個人名がない。かわりにヴェニスにおいて対立する二つの社会的秩序が示され、一つは、「ヴェニスの商人」、つまり「キリスト教的社会秩序」であり、もう一つは、「ヴェニスにおけるユダヤ商人」、つまり「ユダヤ教的社会秩序」であり、個人名は出てはいないが、それぞれ、前者はヴェニスという国家 (ヴェネツィアという共和国家。ヴェニスは其の英語名) の国民であるアントウニオを指し、後者は、外国人で他民族であるシャイロックを指している。

(2) アントウニオが属するキリスト教社会は利子を取らない兄弟盟約的共同体社会であり、シャイロックのユダヤ教社会では利子を取り、互いに相対立している。シャイロックはユダヤ教徒としての「絆」、すなわち、その社会的秩序を守ろうとするが、それは彼から取り去られてしまう。

## 3. 『オセロー』～ 個人名か? 人種名か? (オセローとムーア人)

(1) この劇のタイトルには「オセロー」という個人名と「ヴェニスのムーア人」という異邦人 (黒人) としての身分を示す名が併記されている。オセローが戦いの英雄として迎えられる間は「オセロー」と呼ばれるが、ヴェニスという白人の社会的秩序の中の黒人という外観も手伝って、軽蔑を込めて「ムーアめ」と呼ばれることが多い。

(2) オセローは、彼に対して私怨を抱く副官のイアゴーによって、妻デズディモウナの若きキャシオと

の不倫を真に受けるように仕向けられる。妻の貞節は、彼女の不貞の証拠がない場合、夫によって信じられることによって成立するものであるが、証拠の信奉者であるオセローは、いくつかのイアゴーによる状況証拠を与えられて、次第に疑念を抱くようになり、ついには妻は不貞であるという信念に変わり、彼女を殺害してしまう。

(3) この劇は「ジェラシー」、すなわち「嫉妬」(jealousy)の劇とされがちであるが、この「ジェラシー」の確信的意味は「疑念」(suspicion)である。オセローが証拠の信奉者であるのは、彼が少年時代から放浪を続けて、彼が本来的に所属する社会を持っていなかったことと関連がある。彼がヴェニスという社会的秩序の中で孤立し、その社会的エートスを直感的に理解できないため、いちいち検証する必要がある、それが彼の欠陥につながり、イアゴーにとっては、オセローを攻め落とすために突くべき絶好の局所となったのである。

#### 4. 最終章：再び『ユリシーズ』へ～イギリス人のユダヤ人観と現在の「エルサレム」問題

(1) 『ユリシーズ』で、スティーヴン・ディーダラスが住むマーテロウ・タワーに居候しているイギリス人青年ヘインズとスティーヴンが小遣い稼ぎに勤めている私立小学校のアンブロ・アイリッシュ(イギリス系アイルランド人)のデイジー校長が、イギリスが利殖の才に長けたユダヤ人に脅威を感じていることを吐露する。事実、例えば、ユダヤ人のロスチャイルド家は情報を武器に大きな財を作り上げ、イギリス最大の富豪となり、子孫代々繁栄した。

(2) デイジー校長は、「光(神)に背くユダヤ人」に対し、「光に向かうイギリス人」という自負心を誇らしげに語り、「イギリス人は寛大な国民であるとともに公明正大でもある」とスティーヴンに語り、スティーヴンは「僕はそういうもったいらしい言葉が怖いんです。そういうのが僕たちを不幸な目に会わせるんです。」と反論する。僕たちとは、イギリス帝国主義に苦しめられてきたアイルランド人、ひいてはユダヤ人や黒人を指している。

(3) さらに、デイジー校長がユダヤ人を表した言葉「暗闇にひそむ眼」に対して、スティーヴンが「公明正大」を自負するデイジー校長のことを表した「日の光に青さがよみがえる眼」やヘインズを表した「海の支配者にふさわしく、海のように冷たい眼」といった眼の描写は、イギリス人の内部にひそむどす黒い罪の深さを暗示している。

(4) さらに、デイジー校長は、スティーヴンに浪費癖があるとにらんで教訓を垂れる際に、イギリス人が一番自慢している「わたしは自分の金で暮らしてきた」(I paid my way.)という言葉で自慢げに示し、『オセロー』中のイアゴーが繰り返す「金だけは財布にしまっておけ。」(Put but money in thy purse.)を披露するのは、自己資金によって他人に迷惑をかけないと唱えながら他人の懐を自分の利得の肥やしにするイアゴーの役をデイジー校長が無意識で演じているわけで、これは痛烈な皮肉である。

(5) イギリスは、第一次世界大戦でオスマン帝国が敗れる前に、オスマンが崩壊したら、アラブ人にアラブ国をつくると約束し、ユダヤ人にはユダヤの国をつくると言い、一方では、イギリスとフランスおよびロシアとは領土を分割しようという密約をしていた。これはイギリスの「三枚舌外交」で、後のユダヤとアラブの争闘につながっていく。そして、エルサレムは、国連のパレスチナ分割決議で両国家に分割され、国連による永久信託統治となり、国連の分割決議に基づいて建国されたイスラエルの首都はテルアビブとなった。

(6) 2017年12月6日、アメリカのトランプ大統領は「イスラエルの首都をエルサレムにする」と宣言し、世界中に波紋を広げている。果たして彼の真意は何なのか？